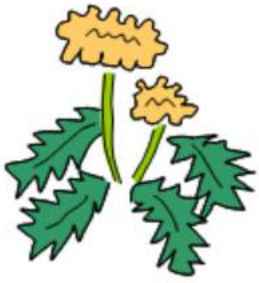
たんぽぽ
NO.439
R6年3月1日
-発行-
〒869-1217
熊本県菊池郡
大津町森54-2
社会福祉法人
三気の会
三気の里
☎096-293-8100



不適切にもほどがある

理事長　松田　健

トイレ掃除を頑張っている職員が好きです。いまは、一年に一度もトイレを磨かない職員が存在するようになってしまいました。玄関に枯れ葉がいっぱい入り込んでいても見て見ぬふりをします。いや、気付いてもいないのかもしれません。大昔の職員は多忙でした。掃除、洗濯、縫物などオールマイティな力が求められました。なので、施設職員はいい旦那やいい奥さんになる確率が高かったように思います。今の世の中では男性がいろんなことをするのは当たり前ですが時代を先どっていたともいえます。また、施設職員はどこで働いても通用していました。もちろん、働き方改革は大切です。昭和のことを書くこと自体間違っているような雰囲気の世の中になりましたが、いいものはいい、悪いことは悪いと言えるような世の中であってほしいと思っています。

障がい福祉に目を向けると、私たちの国は、新たなる福祉の形が定まらぬまま、混沌とした世界の中にあります。社会福祉に従事するものにとっては、求められる倫理観・使命感（ミッション）すら、変化を求められているような錯覚を起こしそうです。頑張って積み上げてきた利用者さんの成長すら否定されているような気がします。

しかし、時代の流れや文化の違い、制度の変革がいかにあろうと、支援者の果たすべき使命は、障がいを持つ人たちの命・暮らしを支えることに尽きます。その為に必要な支援者の専門家としての質の向上（最低限の担保）・揺るがぬ理念は、普遍的なものでなければいけないはずです。障がいを抱えるご本人の真の声を聴く力、その声を具体的な形にしていくことの出来る支援の構築、いわゆる「利用者本位」とは、日常の中にこそ具現化すべきものであると考えます。

時間外での利用者さんの衣類の縫い物、時間を超過したケース会議、入院時の付き添いなど一部の施設にしかない光景となりました。しかし施設の持つ力は無限です。そうした「施設力」を維持することが必要ではないでしょうか。先人からこの業界の文化・伝統を継承した上で初めて新しい流れにも柔軟に対応できるのだと考えます。（故西坂千賀子さんの文章を一部引用しました）

コロナによっていろんな行事・イベントが中止になりました。しないことの楽を覚えてしまいました。制限なく元に戻ってもいいですよと言われた時、良い施設は利用者本位で考え、今まで不自由な制限ある生活を強いたことをお詫びし、新たなイベントや催しなどを企画、運営しています。悪い施設は、何もしないと楽だから、職員にとっても都合いいから、時代の流れとしてこの際時間がかかることは止めにした方が業務改善につながるなどいろんな理由をつけてじっと動かなくなります。

ワクワク・ウキウキ・ドキドキすることがない生活がどれだけきついかコロナ禍で私たちは体験しました。施設のオーバーワークを推進するつもりはありません。時間外労働に対して時間外手当を支給するのは当然だと思っています。しかし、いま私たちはなにをすべきかを模索していきたいです。文中の不適切な発言はお詫びします。

3月

「令和5年度」

令和5年度も残り僅かであり、今年度も利用者さん23名、スタッフ11名で充実した毎日を過ごすことができました。今年度もコロナウイルスやインフルエンザ等により、多少の予定変更などはありましたが、過去のように振り回されることなく、しっかりと向き合って日常生活を送ることができたように感じております。振り返ると怒涛の日々ではありましたが、作業量と散歩に関しては、他班を圧倒するほど取り組めたのではないかと感じています。特にニフコ作業（パッキン装着）に関しては、昨年度も十分に忙しかったのですが、今年度は作業量が2倍に増えました。皆さんの技術と集中力の向上により、なんとか乗り切ることができました。先日、受注先より作業巡視がありましたが、皆さんの頑張りに対して、高い評価を得ることができました。毎年同じことを言っているような気がしますが、次年度も皆さんの頑張りと楽しみを支えられるよう、班スタッフ一同努めて参ります。

課長　本田 誠

「表彰状」

2班では、昨年度から利用者の皆さんの1年間の頑張りを評価できる機会として、班の中で「表彰式」を始めました。いくつかの目的があり、先ず第一に利用者さん一人ひとりの頑張りを目に見える形で評価すること。そして、皆さんが頑張っている姿を支援員の皆がみていることを伝えること。更には、支援員個々が普段から利用者さんの頑張りや努力を評価しながら関わる意識を持てるようになることです。初めての表彰の様子は、5月号に掲載しましたが、利用者の皆さんそれぞれの反応があり、中には涙される方もいらっしゃいました。そんな利用者さんの姿がある中で、私は表彰状を読み上げる支援員、そしてそれを見守る支援員の様子を見ていました。それぞれに利用者の皆さんに、笑顔で温かい言葉を掛けながら渡し、受け取られた利用者さんと記念の写真撮影。見守る支援員も皆笑顔。温かい空気が広がっていました。さて、今年度は、どんな表彰状が皆さんの手元に渡るのか。今からワクワクしています。

課長　岩田 幸児

「この1年。」

3月はどこか寂しさを感じる時期です。昨年4月からスタートした3班（令和5年度チーム）もそろそろ終わりを迎えようとしています。私が就職してから2年続けて全く同じメンバー構成で仕事をしたことがありません。人事異動や退職など色々な事情で毎年、若干の入れ替わりがあります。

今年度の3班はコロナで我慢し続けた3年間の思いを晴らすかのように非常にアグレッシブに活動できた1年でした。文字枠の都合でほんの一部しかご紹介できませんが、今年も数々のエピソードが生まれました。①Fさんの「旅行したい」という想いに応えるため、休日返上で計画を練ったKスタッフ。②Wスタッフはご家族との連絡を密に取り合い定期的に面会を実施しています。面会が利用者Kさんの楽しみになりました。③Mさんの入院はTスタッフにとって、とても大きなミッションになりました。Mさんは無事に退院して元気に過ごされています。スタッフの個性が活きた1年だったと感じます。この1年培った経験、思い、技術、個性を更に活かすことを願っています。

主任　森田 康之

「おやつ作り」

2月中旬、ホットケーキを作って食べました。「4班会議をします」と声をかけ、「ホットケーキを知っていますか？」「材料は何ですか？」といった問いかけから始まり、想像できずポカンとする人や、大喜びする人がいる中でAさんはホットケーキの材料と作り方を口にし始めました。これは知ることからのスタートだと、皆で動画をみて学びました。その後材料、作る手順の書き出しを行い、誰が担当するかを決めていきます。「卵を割れる人」の問いかけに手を上げたのは、三気の里最高齢のKさん。各役割を希望に沿って決めた後は、自分の物は自分で焼くということで、皆で動画を見ながら予習、シミュレーションをしました。当日は買い物担当者が、写真カードを手に材料の買い出しを行い、緊張しつつも、役割を果たすごとに「やったぁ!!」「すごーい!!」と歓声があがりにぎやかに楽しまれました。それぞれが、あんこやジャム等の好きなものをかけて食べました。

主任　石丸 直美

「ピザ作り体験」

去る2月16日に5班のレクリェーションがあり、阿蘇の高森町にある「奥あそフルーツガーデン」という所でピザ作り体験を行いました。今回、企画は1年目のスタッフで、利用者さんと共に体験し、食を味わいたいという想いから、ネットで色々と調べて探してくれました。ここでのピザ作りは、野菜を包丁で切って、生地伸ばし、ソースを塗り、具材を乗せることをするのですが、更には焼くために薪割りを行い、火を起こし、火の番をすることも含まれていました。具材を生地にトッピングする際、均等にばらして置く方、列のように並べて置く方など個性的な姿を見ることができました。利用者の方々は、グループホームやご自宅などで料理などすることはあるかと思いますが、三気の里では普段、経験できないことなので、とても新鮮でした。このようなレクリェーションにて、普段できない体験を企画することで、利用者さんの生活の幅を広げられるようにしていきたいと思います。

部長　松本 慎太郎

療育雑記

「チーム」

業務課長　本田誠

今年度の人権擁護委員会のテーマは、「想いをかたちにする」であり、具体的にはスタッフ個々の支援力の向上を掲げました。先日、スタッフ9名でチームを組み、利用者さんとの関わりについて学び合う機会を設けました。

チームの内訳として、ベテランではなく、経験の浅いスタッフ中心のチーム構成を希望しました。理由として、経験の浅いスタッフの関わりは一見とても丁寧な反面、利用者さんに届いていないことが多くあります。その為、今回のチームでの学びを通じて、利用者さんの性格や障がい特性を理解した上で、相手に届く丁寧な関わりに変化してもらいたいと感じたからです。先ずは、利用者さんのアセスメントを個々で行ってもらいました。利用者さんがどういう性格で、何に困って、どうして欲しいと感じているかなど、苦戦することを予想していましたが、意外とスムーズに言葉や文字にすることができていました。次に利用者さんとの実際の関わり（アプローチ）に移行しましたが、この部分で皆躓いてしまいました。相手のことを頭では理解しているのですが、実際何をすれば良いのかわからないといった様子でした。私自身、ハッとしました。この一番大事な場面での躓きが、経験の浅いスタッフの現状であり、教えられていない、伝えられていない三気の里の課題であると感じました。

私自身を振り返ると、関わりの中で多くの失敗があり、その都度利用者さんにはご迷惑をお掛けしてきました。しかし、自分勝手ではありますが、多くの失敗から成功を導き出してきたように感じています。また、失敗しても次こそはと考え関わることに、この仕事の魅力ややりがいを感じてきました。この躓きを解消する為に、先ずは、私自身の関わりを観てもらうことから始めました。声かけや誘導に関して、根拠を説明した上で伝えました。また、触れ方などは実際に私がスタッフの手や体に触れながら伝えることで、心地良さと不快さの両面を体感してもらいました。

次に、関わりの様子を観させてもらいました。終了後は、利用者さんの行動や表情の変化、時にはバイタルサインを基に次の関わりを一緒に模索しました。チームで2ヵ月間学びを深めましたが、正直な感想として、伝えられていなかった申し訳なさを感じる反面、チームでの意見交換や取り組みがとても充実しており、私自身の新たなやりがいとなりました。また、違和感であった「一見丁寧な関わり」も「相手に伝わる丁寧な関わり」に少しずつ変化しており、利用者さんとの信頼関係が徐々に深まっていく様子から最後は皆のことを頼もしく思えるようになっていました。チームでの学びを通じて、先輩として背中を見せることも重要ですが、向き合い伝えていくことの有効性を改めて感じると共に、私自身も一緒に楽しく成長できた2ヶ月間でした。

先月、人権擁護委員会の内部研修会にて、スタッフに対し「入職時の初心」について問う機会を設けました。皆、利用者さんに関する内容ばかりでした。今後、何年経っても初心を忘れることなく、利用者さんが中心となったチームを編成し、利用者さんのことで悩み、喜び合える組織でありたいと感じました。

生きることは食べること

「三気の会が誇る前田栄養士」

サービス管理責任者　今池一成

アメニティフォーラム内のプログラム「たべることは、生きること」～日々、食事を提供する調理員さんが輝いた物語～において、三気の里栄養士 前田はる美が全国多数の応募エピソードの中から見事〈審査員特別賞〉に輝きました！優秀賞2団体、審査員特別賞2団体でしたので、実質全国2位!?だと思います。

今回、受賞した内容は、“平成28年熊本地震”本震翌日の朝食に関わるエピソードです。

三気の里はライフラインが途絶えた中、本震翌朝から温かい食事（炊き立てご飯、お味噌汁、おかず）が毎日3食提供されました。防災備蓄はある中でしたが、前田栄養士の機転の利いた判断と利用者さんの障がい特性に配慮した食事の提供があったからこそ、利用者さんや職員がその時を心身共に乗り切れたといっても過言ではありません。

今回のプログラムの趣旨は、生活の中で欠かせないが、なかなかスポットが当たりにくい調理員さんにスポットを当てるといった内容です。

前田栄養士は障がい特性に配慮した食事の提供及び高齢化に対応した献立の調整など、三気の里になくてはならない存在であり、唯一無二の職種です。

今後も私たち支援者と連携しながら、利用者さんの日々の健康が維持増進できるよう努めていきたいと思います。

GIバックアップ

「GIバックアップ」

支援員　毛井寛康

3月に入り大津町ではアパートやマンションが新しく建ってきており、三気の里周辺も多くなっています。バックアップとして近年、地域行事での交流が減少傾向であり、地域との連携が今後さらに必要になってくるのではないかと感じました。

現状では、「陣内食堂」や「区役」「地域清掃」に参加していますが、それだけでは地域との関係は築きにくいです。

「何か方法はないか・・・」地域が徐々に発展して新しく居住する方も増えてきます。その方々に三気の里、GIを知ってもらう為に、先ずはどうしたら良いか。

さらにGIを知ってもらうだけではなく私たちが地域の事をもっと知る(理解する)ことが必要になってくるのではないかとも感じました。

今年度は、陣内食堂や区役に参加しており、散歩の際に地域清掃やあいさつ回りなど、徐々にですが、実行できてきています。これが継続してできるように伝えていきます。

危機管理

「つながり合おう　小さな報告で」

課長　岩田幸児

ある月の危機管理委員会から提案した月間目標です。些細なことでも記録や事故・ニアミスを報告に残し、情報を共有し事故や怪我のリスクを回避しようという思いから、この目標を掲げました。日々利用者さんの生活を支えていく中で、様々なリスクが存在します。事故や怪我には至らなくても、ヒヤッとすること、ハッとすること、危険だと感じることも少なくはありません。リスクを回避するためには、そういった状況の危機感や情報を共有することができるかが重要になってきます。

施設での生活は1年間途切れることなく続きます。ヒヤッとしたこと、ハッとしたこと、危険だと感じたこと等、些細なことでも報告することが、その場にいなかった職員にも情報が伝わり、利用者さんを生活の中でのリスクから守ることになるのだと思います。これからも、小さな報告でつながりながら、日々の安心できる生活を提供していきたいと思います。

3月スケジュール

03/01(金)　アンパ創作活動、芸術クラブ
03/15(金)　ゴールドクラブ、アンパレク
03/16(土)　菜の花コンサート(ハンドベル演奏)
03/21(木)　嘱託医来診
03/23(土)　スタッフ全員研修
03/29(金)　産業医職場巡視

毎週月曜日　訪問理容サービス
毎週火曜日　BeTREE役場販売

BeTREE
＜営業時間＞8:00～18:00

betree314

自閉症啓発デー

「熊本県北部発達障がい者支援センター，わっふる．主催自閉症啓発デー2024 in 大津」

センター長　櫨本 英也

毎年4月2日は、国連が制定した「世界自閉症啓発デー」で、この日から8日まで位ちづけ「発達障害啓発週間」と位ちづけられ、自閉症をはじめとする発達障害への理解促進のための啓発が全国各地で取り組みが行われています。

自閉症・発達障害啓発のシンボルカラーをご存知でしょうか？

答えは、〝ブルー（青）〟で「癒し」や「希望」を意味します。毎年4月2日の「世界自閉症啓発デー」に東京タワーが、熊本では熊本城、サクラマチクマモトがブルーにライトアップされます。

熊本では、自閉症啓発デー実行委員会（親の会、当事者さんの会、行政、発達障がい者支援センター等）で毎年の各イベントを話し合い、開催しています。各イベントが載っているポスターが熊本市電等にも掲示されます。

わっふるのイベントは令和6年4月7日（日）～8日（月）にイオン大津店で開催致します。内容は、発達障がいの方の作品展示、書籍、支援グッズの紹介、啓発パネルの展示、疑似体験等となっております。スタッフ、ペアレントメンタさんがブルーのTシャツを着てお待ちしております。ぜひお立ち寄り頂ければと思います。詳しくは、熊本県北部発達障がい者支援センター、わっふるホームページ（https://sanki.or.jp/office/waffle/）をご覧ください。

沢山のご厚意
ありがとう
ございます

【寄付物品】
三気の里家族会
坂梨 清美様　小牧 博則様
牛島 智子様　柴田 博子様
田中 満子様　赤星 央子様
中嶋 久枝様　千田 みゆき様
森川 琇介様　坂田 多鶴子様

【後援会】
藤原 芙佐子様　前田 克英様
中島 佐代様　亀﨑 憲様
森川 マサミ様　佐々木 智征様
國本 寅雄様

【Vo】
前淵 隆子様（ブラッシング）